

企画展

くらしの中の竹

展示解説

2025年11月22日（土）

～2026年4月12日（日）

はじめに

竹とはイネ科タケ亜科の植物の総称で、タケ類とササ類に分かれる。竹は多くの利点をもつ身近な自然素材であることから、農作業の道具や収穫物などを入れて運搬したり盛り付けたりする籠や笊、魚を捕まえるドウ（筌「うけ」のこと）や魚介類の行商で用いられたボテザル、正月の門松や七夕の竹飾りなど年中行事の飾り、遊び道具である竹とんぼや水鉄砲など、人々の生活のさまざま面で活用されてきた。本展では、人々の暮らしの中で竹がどのように活用されてきたのかを、高度経済成長期から現在にかけての変化にも触れつつ、仙台地方の例を中心に紹介する。

※表の写真は、本展チラシと同じく仙台市野草園の竹林（モウソウチク）である。（写真提供：仙台市野草園）

一、植物としての竹、素材としての竹

（1）仙台地方と竹、北と南、東と西のあわい

民具の素材としては、植生から東日本では樹皮、西日本では竹が多く用いられてきたが、特に竹の植生に注目して細かくみてみると、マダケやモウソウチクなどのタケ類は中部以南に多く、東北北部や北海道ではタケ類がほとんどないためアズマネザサやスズタケなどの細いササ類が使われる。また、竹の分布には東西の違いもあり、積雪の影響で日本海側にはチシマザサやチマキザサ、太平洋側にはスズタケやミヤコザ

サが分布し、分布境界は積雪深により異なる。仙台ではマダケと篠竹の両方が竹細工に使われ、市西部はササ類の植生からみると日本海側・太平洋側の分布境界に位置する。仙台地方を竹という視点から眺めてみると、北と南、東と西のあわいに位置する地域であるといえよう。

（2）竹と職人



写真1 チカラダケの挿入

篠竹で編んだ米揚げ笊の強度を高めるためにマダケのチカラダケを挿入。

青森県
や秋田県、
岩手県など
東北地方
では、竹
細工は主
に篠竹と
いわれる
程の細い
竹が材料
として用
いられて
きた。宮城県知事指定伝統的工芸品である大崎市の「岩出山の竹細工」も、その名のとおり篠竹を中心的な材料としている。一方、仙台ではマダケと篠竹両方を材料として竹細工

を製作してきたことが特徴とされている。

仙台の竹細工職人は旧城下町と近郊農村それぞれにより、前者に多くの職人がいた。これらの職人は日用品や農作業、商品の販売・運搬に使用する道具、贈答品を入れる盛籠（「ハナカゴ」と呼ばれていた）など、居住する地域の需要に応じた竹細工を製作・販売していた。

(3) 竹をめぐる時代的変化

高度経済成長期以降、段ボールなどの新たな梱包資材やプラスチック製品の普及、竹材や筍の輸入量の増加などによって竹林の利用が減少

し、適切な管理がされていらない放置竹林が増加し問題となっている。放置竹林はイノシシなどの害獣の増加や生態系への影響を生じさせ、土砂災害の危険性を高める要因となっている。



写真2 放置竹林の筍のメンマ
柴田郡村田町の放置竹林で採れた筍を材料としたメンマ。

こうした放置竹林が全国的に問題となつてゐる一方で、放置

竹林を含めた竹をめぐる現在の状況に対し、その改善と有効活用のための取り組みも行われている。たとえば、放置竹林で採れる筍を材料としたメンマ作りなどはその一例であり、また牡蠣（かき）の養殖棚の廃材を利用した竹炭作りなども行われている。

二、日々のくらしと竹

(1) 装いの中の竹



写真3 齒継ぎ下駄竹張り

足を乗せる部分に竹を張った下駄は涼しげな外見と履き心地から夏場の下駄として履かれる。

李や伸子針、衣紋掛、竿上げなどの衣生活を支える道具の素材としても利用されてきた。

竹はその艶のある手触りのよさや涼しげな見た目から、直接足が触れる下駄や草履の素材として利用されてきた。

また、竹は軽さや頑丈さ、弾力性、剥離のしやすさなどの特性を活かし、行

(2) 糸づくりと布づくり



写真4 糸車と箆（おさ）

糸車は竹の弾力性を活かし、薄く割った竹を組んで車にしている。箆は機で織物を織る際に、緯糸（よこいと）を打ち付ける部分。

仙台地方の丘陵地帯や農村地域では、かつて農家の副業として養蚕が行われており、特に旧名取郡や泉区七北田などでは盛んに行われていた。そこでは現金収入として出荷する繭の生産はもちろん、出荷できない屑繭からは自家用の生糸を紡ぎ、布を織つて家族が着用する衣服を作っていた。そうした糸づくり、布づくりにおいても、竹の特徴を活かし

盛り付けなど、食にまつわるさまざまな道具の素材として活用されてきた。

また、竹はそれ 자체が食材として用いられてきた。春になればモウソウチクやネマガリタケの筍が食卓を彩る。また、竹の葉は搔敷（かいしき）として料理を華やかに引き立てる同時に防腐効果を發揮するため、飲食店や食品販売業者などで現在でも重宝されている。

(3) 食にみる竹・道具として、食材として、

仙台地方の

丘陵地帯や農村地域では、かつて農家の

副業として養

蚕が行われて

おり、特に旧

名取郡や泉区

七北田などでは

盛んに行わ

れていた。そ

こでは現金収

入として出荷



写真5 米揚げ笊

仙台地方の竹細工のうち、主要な生産品の一つであったのが米揚げ笊であつた。

米揚げ笊は、アズマネザサなどの細い竹を材料とする場合は表皮を内側にして編む。こうすることによって水切りをよくし、米が編み目に詰まらないようにしており、竹という素材の特徴を活かした竹細工であるといえる。このほかにも、竹は食材の下準備や炊飯、調理、

(4) 住まいの中の竹



写真6 団扇と団扇置き

冬になると北西から南東に季節風が吹く。強風から家屋を守るために、東北地方では屋敷に居久根（いぐね、屋敷林のこと）として種々の樹木を植え、中でも竹は防風だけでなく食料としても活用された。また、竹は家屋の屋根や壁を補強するための部材としても用いられてきた。

さらに、竹は家屋の中において快適な住生活を営むための設えにも利用されてい

る。団扇差などは中空で軽量という竹の特徴を活かした道具といえ、また節を残した造形は竹という素材そのものの美を活かしたものといえる。そのほかにも、竹の特徴と美を活かしたさまざまな竹細工が我々の住生活を支え、彩ってきた。

竹ひごをチカラダケとして材料に加えれば重量物に耐えられるよう補強することができる。

また、真っ直ぐに伸び中空で軽い竹はそのままの状態でも活用される。太さのあるマダケやモウソウチクは果樹の枝を支える果樹棚に用いられ、蔓が伸びる植物に対しても支柱として用いることができる。

そのほかにも、穀物の選別や近距離の運搬に用いる箕や、本展では展示スペースの制約から触れないが、常設展示して

三、生産・生業と竹 (1) 農業と竹



写真7 箕

手前から樹皮で作った箕、竹と樹皮で作った箕、竹のみで作った箕。箕の素材には地域性がみられる。

農業では、農具や肥料、種や苗、収穫物など、さまざまなもの、時には重量物を大量に運搬するタイミングがある。こうした場面において、竹製の籠は欠かせない道具となる。竹製の籠は軽量でありながら頑丈であり、竹を太めに裂いた

いる「土摺臼（どづるす）」（穀から穀殻を外す道具）やカラハシ（脱穀に用いる道具）など、農業では多様な竹製品が用いられている。

(2) 漁撈と竹



写真8 ドジョウドウ
篠竹を笊のように編んだドウで、「ザルドウ」とも呼ばれる。

竹のもつ多様な利点は漁具にも活かされている。真っ直ぐに高く伸びることで長さを確保でき、中空で軽く堅牢なマダケやモウソウチクは、養殖棚の資材として現在でも使用されている。また、仙台竿など竹製の釣り竿には竹がもつ強韌さと彈力性、そして、素材そのものの美しさが活かされている。そのほかにも、竹はさまざまな漁具の材料として用いられている。

なお、東北地方、なかでも雪深い地域では植生からタケ類が少なく、漁具も篠竹（アズマネザサやスズタケなど稈の細い竹）のほか木の枝や樹皮を材料とする場合が多い。しかし、

仙台地方はタケ類・ササ類両方を用いて竹細工を製作しており、たとえばドウ（筌「うけ」のこと）などをみても、マダケの竹ひごをすだれ状に編んだものもあれば、篠竹を笊のように編んだものもある。

(3) 商いと竹



写真9 御用籠

荷運び用の籠。マダケの植生から御用籠の生産が多くなかった青森県八戸地方や北海道から多くの注文が入る、仙台地方の主要な竹製品の一つだった。

昭和三十（一九五五）年にはじまる高度経済成長期には段ボールや発泡スチロール、プラスチック製の梱包材が用いられているが、かつては木箱や竹製の籠によつて商品が輸送され、また行商人は天秤棒の先に竹籠を下げ、商店では自転車やバイクの荷台に御用籠を載せて得意先を回っていた。また、店頭においても発泡スチロール製の

トレイやレジ袋を用いて販売されるようになつたが、こうした面でもかつては竹が利用され、肉屋などでは商品を竹皮に包んで客に渡したり、贈答品を竹製の盛籠に詰めて販売したり、竹製エコバックともいえる買い物籠を使用したりしていた。

こうした物流や販売以外にも、竹はかつての商いのさまざまなお場面において活用されていた。

四、信仰・儀礼・年中行事と竹

(1) 信仰・儀礼・年中行事と竹



写真9 御幣

若林区河原町の旧家・小西家で祀られていた御幣。幣串に製作が容易な竹を用いている。御幣は神靈の依代や供物、罪・穢れを祓う際に用いる。

竹は非常に成長が早くまとまって繁殖し、表皮は年中艶やかで青々としている。こうした特徴から、日本人は竹に対して強い生命力を感じとり、神靈が宿るものとして捉えてきた。そ

(2) 仙台七夕祭と竹



写真10 仙台七夕祭のくす玉の竹籠

仙台七夕祭は東北三大祭の一つで、豪華なくす玉の付いた吹き流しが象徴的な飾りとなっている。この大きなくす玉は戦後、森天祐堂の森権五郎氏が復興期に考案し、昭和二十二（一九四七）年の審査会で一等賞を受けたことから広まつた。重量のある飾りを支えるため、マダケなどを用いた。従来の細い竹に代わり太いモウソウチクが使われるようになり、さらに、一九七〇年代以降、商店街のアーチ化によつて飾りを取り付ける竹の立て方や飾りの配置も変化し、さらには吹き流しを横一列に飾り付けるようになるなど、時代とともに竹の用い方や飾り方も変化していった。

五、遊びの中の竹



写真 11 竹スケート

竹を半分に割り、体重で割れてしまわないように節を残して斜めに切ったもの。

現代のこどもたちにとつて遊び道具は既製品を購入することが当たり前となつてゐるが、かつては身の回りの植物などを利用して自作して遊んでいた。中でも竹は中が空洞で軽く、丸みと長さもあり、また縦に割れやすいという特徴を持つことから、こどもにも加工がしやすい材料といえる。また、竹は屋敷を取り囲む居久根（いぐね）や自宅周辺の野山等に植林され、または自生しており容易に入手可能である。こうしたことから、かつてのこどもたちは竹とんぼや水鉄砲、竹スケートや竹スキーなど、竹を材料にしたさまざまな遊び道具を作つて遊んでいた。

【主要参考文献】

- 岩井宏實・他 二〇一七 『「絵引」民具の事典【普及版】イラストでわかる日本伝統の生活道具』 河出書房新社
上田弘一郎 一九七九 『竹と日本人』 日本放送出版協会
上田弘一郎 一九八六 『竹づくり文化考』 京都新聞社
近江恵美子 二〇〇八 『国宝大崎八幡宮』 仙台・江戸学叢書3 仙台七夕—伝統と未来
鹿児島県立博物館・他 二〇〇七 『福島県立博物館平成十九年度企画展図録 樹と竹—列島の文化、北から南から』 福島県立博物館
工藤員功 二〇〇〇 「竹」「竹細工」『日本民俗大辞典 下』 吉川弘文館
小谷竜介・他 二〇一〇 『仙台市文化財調査報告書第三七五集 仙台旧城下町に所在する民俗文化財調査報告書(7) 仙台の七夕飾り・仙台の竹細工』 仙台市教育委員会
佐々田弥生 一九九五 「竹とくらし」『足元からみる民俗(4)—失われた伝承・変容する伝承・新たなる伝承—』 調査報告書第十四集』 仙台市歴史民俗資料館
仙台市史編さん委員会 1998 『仙台市史 特別編6 民俗』 仙台市
日本民具学会 一九九七 『日本民具辞典』 ぎょうせい 室井綽 一九七三 『ものと人間の文化史 十・竹』 法政大学出版局